

~ 5
6645
2



能事奇人法書く申

竹憲玄玄一送符男 藤原重重重 参行

松尾桃青

葉書に俗名甚七宿辰七宿心右方等此武院河

松尾忠左衛門ハ侍覺上種裔法何某此進屋方より一年有也

里て有口を立いで活小より吟叟又進学するより七年寛

文の末つゝと東武に下王礫門の水石修成瀧夫と方内て功

哉終家の比難髪一と風口種材といふ源川又唐を結ふ

三つ々々色蕉を拙く来む色あり世小舉く葉蕉唐二

称に終報堂名唐葉蕉唐初此名を宗房といへり後桃青と

改む又杖鏡子色佛切等名法号あり至嘉より學識宏宏博

葉象飄遠古今小生人系紀所昭亦里國祿意哉仏頂

河又惶王画法を唐河作六了短より尚財との種は後傳

能事奇人法

5
4317
2

昔者鳥醉藏此物也久矣後授之於白河鳥黑
鳥黑深秘而不置云往年予遊于奥羽而道經
其地竊得就鄉人而摹之今茲縮圖以補蓼太氏

蕉翁真之脱漏而已 儀伴閑人

之夕

予

日

地

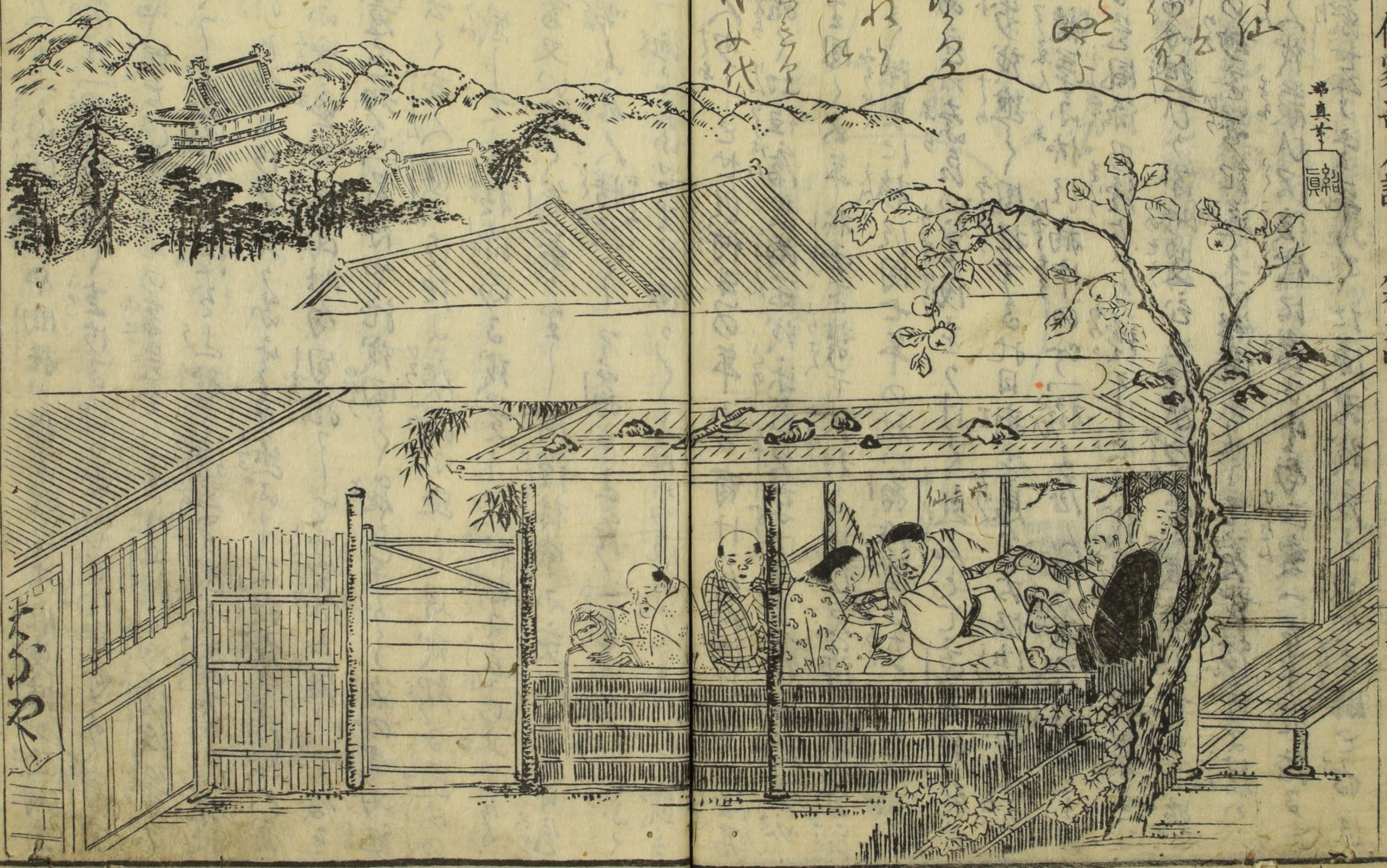


す家人も一己せは何もの年ふり有けん石山此奥又密居
して始く幻住庵岩幽深茂木む良亭四季の秋鹿嶋志吟
仍河至同く又年松玉を携りて大移又遊ひ之跡二年首良
を平く陸奥に極は同七年の秋ハ翁修賢又在一分浪屋
振もあまハ奈良の室傍をうけく赴んとて支考修賢茂
侍ハ歩茂進く風杜する此日刺を患々大坂由崇亦志屋
賢ちが後至小休は病中の吟一極ハ庵んで爰ハ植樹をうけ
ほりる是風詠乃経方り後一七日茂るく致は兼又十
有一嗚呼悲ひう亦此史云とたびは左ハ龍舉してあり始
同社の妙を筆記遊り一能譜を一其美茂侍奇又慈ハ
光秀人茂殿ハ以後代に裔る言句西爰一古くは強子を
後進察せし平くた家考茂るく以て三昧と為は

非家二八卷

六斎江
小竹
之
馬
志
神
上
代

真筆
印



伊家奇人談

三

秋ぞんじ一象深の雨や西垣がぬふ此をよれ東坡の西湖を
 侍小庭に一田一板挿くまける柳の彩古今此奇あり催す
 古池や煙とびひまむ水の音はまらなく玉燈の妙境紙筆ふ
 流ぐり一筆は雲鐘と上程の淡茶の幽玄酒ち一木此
 下汁と給も片久良くあそむ遊みて皮厚くは「六月
 や家小雲並く嵐山此句句法して濃厚三渡して後そ
 此旨意を知る一名月や池我同く取とすり洛の嘯也記
 して云く友人雅園は死又廣深ふ遊ぐ月我記る適よの
 詠を感して手精深ある我覚うこ「枯枝は鳥の止まらり
 秋此意又いとく翁若くま一附陰林中不更杜は一日是
 句我唱小庭人得法と一「空をよる鳥よさふ我秘ふく
 一「一池をよるせ里と一「何りくと一「何れもくも秋の風或ど

傳ふ翁慈は杜ぐ此句我垣より風の字を山に替て北枝の
 示は枝のそくいまど風此字の傳は家小は如す翁警を因く
 我たむむるは女也地よ子何り送り月く思家く一「必
 病小淋和味を忘るふ元孫中翁加別金城は形御高方枝
 休家の砌り表字小して一「家舎合何里一に生客意山海の珠
 味を没けたり煙は味は諸人すく後舎我約さんこは舞い
 はく今歌書とてあ一「心此程の云は又由ぐり一「恨らくい
 風種は結ふ一我を深をよるん定めず或は程来り一「登
 森北爰我結ひ或は山中小一村名をを渡ぐ程に形る珠
 揚滋味あに風家の本名あふんやと挿しと生地は水枝言
 柳全等此名家我おせりも生家法のは名屋りち係り一
 よ月てふり一十六歌のわつ小家此始り宗院聖の作古今

世篇の存り出る者あり。その一「平穩」の齒量と字一魚の巻
 平穩中寓無限悲涼宜なり。晋子の雄高を擧する。或
 殊る一を去る而を終く後を人は彌する。山陰東を何や
 伊り一葉州一梅が香を妙つと日の出る山陰の系一是は山を
 目は高を招けけいあつ海はささぬ人のさよ一及は尾の木は
 言ふ小倉水を一盤すはく骨響ら一忠北疑一今ははりり
 人も年よれ初時はあままを正愛つちりに流く味いすんが何る
 屋りすま交風種破路一七一愛一て難強とちり再愛て
 西漢五言とあま三愛一三歌行雜詩とあり四愛一三流案
 律詩と成海蓋一益成實と改免實を益小和けるも
 本和和奇の習りめといひは一又いひ一一極滿北連奇といひ
 ば何一もて正海難波津の浪といひるに難義和臣一みづれ原
 和撰系もと似とまりる一廣和意もすが海望く系といひる
 西江法沙一流き沙とかりる海を北有海と望初一句二句をい
 歌厚り宗祖宗長掛河の城と極く所出の能潜と賀句舉句
 といひるもちちく只云控あり宗湛奇武等大難波集飛梅子
 句成撰よといひるといはすと一舟の準繩と立げまりる我和系
 貞徳をうとび 九重ありは名評を蒙てありそ武大率
 定はる時一難波の宗園古風を感破一形作を叙起一て
 一時の晒落人我絶倒を一む是我法林と稱す海いすと宗
 系たま一以その風を回替人でよま北史あまりが神の眼を異
 て次韻集を撰に句を流と千句と有次名の名の稍法林成難まつんと
 する根ば一尺ゆ遠一松津の風骨を探王山家集北寂寥哉
 たらり性一函玄名件人情の理屈を翻るはれは正風安の

西江法沙一流き沙とかりる海を北有海と望初一句二句をい
 歌厚り宗祖宗長掛河の城と極く所出の能潜と賀句舉句
 といひるもちちく只云控あり宗湛奇武等大難波集飛梅子
 句成撰よといひるといはずと一舟の準繩と立げまりる我和系
 貞徳をうとび 九重ありは名評を蒙てありそ武大率
 定はる時一難波の宗園古風を感破一形作を叙起一て
 一時の晒落人我絶倒を一む是我法林と稱す海いすと宗
 系たま一以その風を回替人でよま北史あまりが神の眼を異
 て次韻集を撰に句を流と千句と有次名の名の稍法林成難まつん
 する根ば一尺ゆ遠一松津の風骨を探王山家集北寂寥哉
 たらり性一函玄名件人情の理屈を翻るはれは正風安の

大成して天下後世はごらくに傳傳中興の太祖と稱譽せらるる
宣方依りお捧まは此變是及よ油切を依傳の傳記の云彩我成里
水さ之河ひ千幸業若一六棄にのくお生我海度する
等しくやいおん去小學尚すん
支考が若赤抄のいささ
子細あれが接とせしむ

樓本具南

後改
井

板本の母才之角之竹中東照が子あり赤と源助とを一討の神田
於玉が池又後きり儒成実の秋生小學び医を尋れ何某は
成大諸和当虫を佐玄龍画我英一掃の借りて多能あり何の
以ありり意つよのく生冠首より晋其南ハ易經の文よりて室
晋秋と米希が祝又瑞する此字有り一名樓舎晋子傳と雷
桓子遊川とも画名萬子とい人里狂雷雲根而崇六病庵善哉房
文合高若此諸号あり生性もや枝逸りて人をも拘らぬ

酒を飲ぐ生確たる成石伝るり一或日ふふは
北舎進小仍合をんぐ管心一けり我南生傍ら小碑并一仰き
居より己ま一妙句はありこ起りぐりくいふ仰見銀河底と傳と
冠里公室中北舎小金掛ありて銀掛を記の如何と執事西へ
答く金玉ありて銀玉ありきり如く一と生所智大累出の類あり
貞享中照陣町一居我様す破雲が記了嵐宮と成小回居せり
と載るるも此法有り或才あり一巻の息を巻に收若き足傳
返して回く此書何あり小初んちり我附書我若するに及ぶは
連中の先聲又後すん一と依是能なく書を交たり扱点料も
返してんやとの答く料ハ不償又收並ありと返は里一もい
をり一今時人その徳もたなく生力もあくて叨り古人酒
落し撥一風種我驚り一甲乙を立ると同日の夜もんや昔

生言ふ事しつて其記を連申くところまゝとて其後を人中まゝりりハ
 「三味線の糸より細記能借しつてんころくといふまゝに記連申
 匹一三弦此糸より細又といひぬてんころといひまゝにき
 こいふまゝとて清誓するえ深北百共神明町へ移居はる此れは
 正の月庚申の夜あつとに湯しつて其後立退てて個度きんごま
 荷ふ作り匂ふり記おしつて言声お唱と叫りり申申お寄申居人
 俄し宅習しつて生懸居ると思ふ居し後堂場所へまゝ居
 清ふ御祈りし事近隣ふ此味居の家あり其時のに號一梅が香やと
 ちるまゝに救生懸居る此句何まの集りも又人ぬどもさうらの漏す
 取あり室永田年二月春暖生閑炉の吟とて「吾れ勝室」一記を
 しつて居るまゝに病お取しつて少ふせむしつて又此句一一生此吟
 事と成おたり或はよき中く種目つていふハ何やせむを後うけ子我傷むの病
 経よりするゆへに初め此子持候へ一平面居人の言と冠王公より
 湯る所の文字出しつて是れ其記の字お取附る持ありあり
 此お祖一並り武時門人きふか一戲言ふ語み出し日後行く
 已りおく振記指活の胡麻交此申へ盛く一さお一あり前何ん
 ちく喰ちて持候り種強くつ人のまゝに我事お事僕お酒持せ
 るの記しつて言敬き一圓量自作お像を搜し出しつて
 簾纏つて一剛の伴人治しつて武公お記より一寄書といふ
 信しつて一寄の作しつて一寄我記しつてまゝに生懸の跡を
 是お懸す生流此種しつて高尚なる妙も常にお歌付せりといふ
 水や何おさるはる川苔の味「照屋や横はごさぬ山りつら」一
 ろ小箱又奈流や志本ら至「吾れ照の面おさるや照多」一此れを
 屋上の松を誰まゝりつて「うら」松やるも舞食ふ字はの山「吾れ

生言ふ事しつて其記を連申くところまゝとて其後を人中まゝりりハ
 「三味線の糸より細記能借しつてんころくといふまゝに記連申
 匹一三弦此糸より細又といひぬてんころといひまゝにき
 こいふまゝとて清誓するえ深北百共神明町へ移居はる此れは
 正の月庚申の夜あつとに湯しつて其後立退てて個度きんごま
 荷ふ作り匂ふり記おしつて言声お唱と叫りり申申お寄申居人
 俄し宅習しつて生懸居ると思ふ居し後堂場所へまゝ居
 清ふ御祈りし事近隣ふ此味居の家あり其時のに號一梅が香やと
 ちるまゝに救生懸居る此句何まの集りも又人ぬどもさうらの漏す
 取あり室永田年二月春暖生閑炉の吟とて「吾れ勝室」一記を
 しつて居るまゝに病お取しつて少ふせむしつて又此句一一生此吟
 事と成おたり或はよき中く種目つていふハ何やせむを後うけ子我傷むの病
 経よりするゆへに初め此子持候へ一平面居人の言と冠王公より
 湯る所の文字出しつて是れ其記の字お取附る持ありあり
 此お祖一並り武時門人きふか一戲言ふ語み出し日後行く
 已りおく振記指活の胡麻交此申へ盛く一さお一あり前何ん
 ちく喰ちて持候り種強くつ人のまゝに我事お事僕お酒持せ
 るの記しつて言敬き一圓量自作お像を搜し出しつて
 簾纏つて一剛の伴人治しつて武公お記より一寄書といふ
 信しつて一寄の作しつて一寄我記しつてまゝに生懸の跡を
 是お懸す生流此種しつて高尚なる妙も常にお歌付せりといふ
 水や何おさるはる川苔の味「照屋や横はごさぬ山りつら」一
 ろ小箱又奈流や志本ら至「吾れ照の面おさるや照多」一此れを
 屋上の松を誰まゝりつて「うら」松やるも舞食ふ字はの山「吾れ

日や船院どの顔にいろ「悪まれくおぐらめる人々の塊はれ
 正変を以てするもの「文と詩と様はしおす後りも眼前風松
 人西く云ふはこれ能はず「云雨や家我回く晴なく後集又か
 「夕涼よくと男み生れりる雄枝倫者」「稲妻や竹のふらふ
 為乙園が洋の什はよ出るに似たり「声うれて猿け齒か「露の
 月或洋すくく今令此子從夏於詩何減李王与浩宋「意盛
 子て歩るく交帰く糸「名月や夏はくく小松の軽「冬来てを
 鹿鬚小こぼる鳥り奈空縦横句在刃月屋「史能潜の於鹿
 翁与此子也一朝不可論尽去ら様を後人何るひの思へらく晋子
 調異師翁と殊不知難而合者有り蓋「支考評六の紀余儀備
 多く空作思を焦「奇我索むといくども意存此操晋子
 が自放ちるに及ばざるもや遠

服部嵐雲 附烈女

服部嵐雲ハ浪別小坂並村小生に幼名久る助武出湯崎天橋
 久若助を此豊のりこおの長里で東武とお杉屋隈西ふは「何
 いぶり「同名おんあつと
 又井よおお公も勅とま「そは「産を世といひり「一年君
 僕の信して我第小坂里井の端又寄く足澄人とするに卒
 有り紀雲り愛の障来る後尺く「武士此足で米とぐ愛う赤こ
 越き口すさみ「う素より業成難此本小抱く山色を赤まん
 こと志一止ぐ「我社を以て「居宅を退の日常御衣類
 稚雲等よいすると「雲と手に携へば「其後「一
 嵐雲と其小深ひ出いつ「う蕉つ「極く能名を治助といふ後
 嵐雲といへる「嵐此庭の富を「でりと思ひ寄付る悪さ今更
 政んもおこが候「と笑みり度く「なり書れ名を列いつるも

山

山崎りや雲のくもも横たぬ

如考九句

鶯十六屯廿

其角

妾 半面美心

沉香亭裡

白田

木乃りふ 世にあらば 櫻東

半面美心

百花嬌語

翠蓋

隊主王簪

探荷

弄晚涼

探草

し

九

し

白田

此曲乃
 伊家奇人
 所作也
 其音
 如
 此

此曲乃
 伊家奇人
 所作也
 其音
 如
 此

此後方此切なりと神寂が文又記せり初り一英房唐室を夢
 此神河王後一雪中庵一不白斬玄峯堂と号せし一得福
 雪千山を埋む什麼孤暈不白赤るといふ語より好むこと常
 に海雲才文へ登す昇る御ありぬく才文へ申し入る時
 少回て云く玄春望別送乙片語今秋归来相見了也即今如何是
 行脚眼と答て云く観音境裡古案樹沙いはく案無古今色作麼
 生無古今色的一句割進ぐ云く春色無高下花枝自短長沙是
 を領して休玄と号稱して冬雲我返起玄師と号す可号一地
 後阿り生妻唐猫を愛する子法よるより雪法てそれ融成
 愛す海りも福阿る片一人百に増すも愛物益物いむべき日
 小も生看我喰す偏直と云くはといふと悲ても此を改はなり
 或日書此化形我幸ひ溜り猫をを育んぬる一日書又返り

来く管心香そ法乃才を知らばと答ふ妻泣叫く慈慕
 小と切なり一猫の妻いりある君此奪ひけりかこちつ心此
 悪くち望ぬ隣女をとり小生作銭告く猫の形先を語る
 書大し恨く交ぬ教いとみ争ふつ人打家法させて高
 公哉和く望ころや睦月はト免の交ぬいけりひを人く又
 笑れてと踏出ると「恨ぶ哉忍よやち内取此玉を祀とへ此
 時哀るゆふと有り日一とせ望陽の詠り一芙蓉白菊との
 介此名い赤く色ぐち晋子流く感して我生涯業此句是
 及むは此と望より云く「此此家我少小若何まが沙の必業や
 此海と此句ありおと漂は至しとあり生花作老成沙翁
 集津心置くも亦何と分んや一元月や睦て雀の物ぐと望
 不言祝賀還在其中一蒲團若くを揉くも姿や东山壁言嘲の

是より此屋交す此与平といへる若くは夕暮食す我送りる極意
里三時一室永元年九月外に菅原の許にその條を作
曰く略若く里一財あり流し居す弓矢杖控て十五歳と
たの二十五年先此に合へる三十年末大居士何の位あり
先妙慈尊又思く風種此名ふ言ふり京師小かあしく諸
子の院一産す南におる衆を押し東北に風成後す
此時正風体の眼を管地湖抄水まげ里より五月雨とや
の撰を蒙り不易流の巻成かち後核の彩風と陰でも
幽玄若細みと忘まは一本枯の地も之は片ぬ時あり
や雲雀の寸文字を申り又何水の伴秋一や雲鶴や
小毛獨り月此宿に詠して先抄十年を驚りし月賞歌の才一
古今の乗送にい極里たれり一代の乗送と一友句持る人

けく稀あはる一此を妙といひ詠一教句に及べり二十餘年
と抄水の功つり里暖詠名落材舎よ抄をむく人石山の幻怪
唐よ考を付ふんざ一深くをこを難波の愛成て
體を解た義伴奇此藝も扇衣小潮流を推ふは後の
博茂堅く身里諸生成ちつけ初人を投く越の流伝
智く有波難波の虫を選一勝此卯七代助く渡をを
むけ我大狂一力成よせく文選序考れ一人進み病
床小却てと三夜句他の虫を家へはよ何ある意つ滅亡
月日や何里らん去年のあし申越の院家藝ト玉ひぬ
今年衣文若文章卒す秋九月この郎去く子も此定も
ぎ此思ひをけせく人若揚我影るるや下果又支考り
材定生の松奇何り詠一略

借文章

借文章の先代は尾陽大山の寺にあり幼より学成好む倭
 漢を究む好む心より漢母小はく孝の心を牙とせ生る所を
 は赤成ゆつりく生るを慰む嘗て右の指小痴つけ刀此柄握り
 一と酒り壯年武成禱して福を宗とせ其時の口説多年夏屋
 一蠅牛化做蛄踰得自由火宅最惶涎沫不偶尋法雨入林丘夕山涼風
 一まゆる成雲れおやふふ法華経を讀誦するより化るる
 一とつふ何ぞ法より門を遊んぐ時く興成憐みす我るる
 波瀾此述一福着く家一啄木やや福成探はる宗若中一聖靈
 毛少く假此世の福を福く宗一有明く振向ぐと死守く家一美
 言く表の家もちり重り随言句をその作を可於家水
 元年二月十四二葉して此世成去る人去來流成作

曰く今茲如月来は日月の神意を殘る物より福成守はり
 里ぬと湖南の正秀が許より知はるる日小推ふはが里潤
 止免り縁ぬ津久くとい人若むり一我思ふは尾張の五
 生れ在由儀に依つて常極其名も有る一ころや一日お意
 一人を假一竊一君父の家成悪び出道の傍小懸ね
 きり墨滯より引替らぬる中累 洛志史邦又ゆり里五兩亭
 に假寐一とつ小見く神らぬ一あり二尋此成松の中
 小臥を折一益くは百の火燵の上より面成片一向て吟舎ね
 何く此人を鉄に支成妙妙云ふけ借是道に進み学ば
 人若よまむんるり月成紙なるとはと成とありま下地
 の艶起るり美むと一絶も性善み学ぶる成成はす
 感有りて吟道人あるる借すたとけりお忘とるる如

先沙流門へ海里のふはまはたの句ども出集めはるる世
 らち「大系や探れあはれは月夜とていふ句ありてつ
 入はるしふ同様の句よ進まると代陣しけ侍あり
 うしこのくこと我うく一も侍人あり又難波の病床例
 侍者どもに伽の敷句をすすむ今日より我れ後此句あ
 るはし一字名お後我加ふつうとてはとほひりれり或
 吹飯より鶴を招くとおろしは系扱よりけく壽を盡
 或と吹飯く次は百ふあるに便を死思ひふを自れ又
 病人の跡にすし海やとむ川すたは海に流るしりらる
 娘しぐと筆染るし尺屋り唯うらうらある業落れ下の
 室はらふとりのるし句はみど交承出集るうりこと感
 むひりる實し新法おぬいかに流流アを勤め無けれ

抄り作銭あるは暇何ぞとていふ樹小ふを思ひ知侍り
 けれ先沙辻はの後も猶所松本のをれり進みあつ
 知く義仲寺坊うくの山又茶店を結びければ按するに子
家上の屋するがぬく侍の沙名おもけを去とい申されり或留りげら
ゆや家ありかあり住なりとてゆいりておめで志何何く致後すても通仕
て世との風しりり成縁りるとと梅丁と沙海の平生あつし去來時時門自
交承ありと系しりり成縁りるとと梅丁と沙海の平生あつし去來時時門自
 啓田水相違ちよお打吟し或杖を携へる落材舎を叩い
 飛らんご優りたの松鶴とも懸りけは是予と彼山はひひ
 まく脚下琵琶湖水拍頭花洛山と眺望我意にし侍者し
 けんろ山を下らげ侍の誓何り予い昔ふたごふれ役あ
 りて久く遠坂宮幕中なるはと去るは去る年の神
 堂月一糸の深哉倚み茶店又着く「字記帳や思つくれば
 山坊うくと申く今宵有茶話より門を忘るうと云候

斜あぐに文りすく小雷鳴地よ之に吹風靡をはあちけ
 此の虚室欲琴閑是空満山雷雨震寒更と具トおられ笑ひ
 照してあまはぬ身は之残鳴くくはうあまを笑え一雪染れ空
 色再を彩るる今むちう一記名妙み残るる白九十一年の筈
 の三年此帳不似一雪恨るる百年名然を生す惜ても程名
 ちくく此一句成手向く来くと涙成代傳里信る妙と一記
 名きく妻や三年の生ゆくれ

森川許六

森川許六と江島彦城此士一名百仲字羽宮師と桑河松と自稱
 了是成五老并と号にみき井小四徳河少一草字藤根已記二
 小揚揮夏三又雲花墨四一紫芝岡許六自号風雅の塚
 るるの栗田が文と知るる人と成り敏達くく徳とるる小長ざり

又画成能す意符も画と名く少とちう一能勝ハ表す才子と
 奈はと出けり生殺句よと具せり一本箱と成る記桐も若
 菊うか今夕飯の妻此妙傳や帆くけ船一口五月の波浪さ浪や子
 規一竿と死装束や古用平一着終れ万を招致忠盛り哉一欄
 杆み定るや葉れ乾法少一初霜や治承江守名人を嫁入のつ
 色もろり津多、江沙翁歿後そ此送愛の櫻樹を伐く肯信成
 刻み是成大津の智月尼一掃る生又小いそく

此所教をたせり持手はせり此う一目お交存の拙者よりいそ
 す此と無け居る像も皮延引け度解も手小好れら且此
 を并此古本とて刻みすひらせん兼て大ちも像刻と度
 ヲゲてても初葉あくけむくく人程又此中ふ不
 十月三日 兼の後像一満屋記葉もち一 件六

智月尼様

智恩遇の源流を志まはるる事初此如く惜むる所晩年癩瘡
 重くして人小面する事一適道代官人と存取束る人阿是
 こそ屏風を志記すく違ふと成許は後一年金塔の築子い
 く川て對面せん事成れをむいりて屏風成陰んやと病床
 迎へて飲酒不記よぶる教刻磨りけ後く奥氣苦くたり
 子ちくく事て研破ちく破りくく後至合々るは是バ病りく
 事不悲を子小隠也一も一度茶子小お見えを後く懐さ
 風雅に極ての大丈夫ちりりとい人洋一合休とを正徳又
 小死に後焉の備り一時打破屎糞壺芬々臭氣供梵天下
 死ぬる事と思ひし小上手も死ねて屎上事なり此子終身
 已まが成代句撰して化を寄菊物と思へりなり平生の
 後中一卜詠を記く入るもの我れみ方里と云ふまなり
 まで膚撓る目廻りけるい伊家此一奇物と稱すべし

東宮村支考

支考を考渡お此人はト免後若小入く結露主といり
 冠の冠なり吹毛洒也春三月影揚牡丹花下風といつる傷成作て
 宗つれ言借り末粒も後ねもるる東於武寺の大舎小碧嚴
 講主ハケ條の前株成能同に成り法春生を妙み違り
 後機を控きたるころや嘗て野陽山田より成置るが何と
 風家に親み交る所り涼菴その才成備之能借を勤く意つ
 入む功成く阪口すその見龍といひ又隠る此名白狂
 二と後又没る所りて及るなる事三燈の昂小まする或
 之梅花仙人名稱あり坊号成東華西華と唱るは伊家一遺

十條の僧より推し立てたての盤子と呼ぶ家又在さまの獅子老
 人との小支考といふるの舊名ありて字二教に涉りたり又文成
 以て句及す著す所十編古の抄録ありて確編ありて後
 句を評てい亦と評し魯衛と政身一行校も勝や加よひて梅原の
 灌仏や目出と評す小古はありて惟子の形も安し淺く百一年何る
 声小聴ふ月夕の「惠んまよなまの世で綱代身はどめけ子僧形
 成勢す傍律をきて居る里るが評し衣鉢を解の公記ある時
 國に禁小使すれば也舍利の系申比肉食ふとの校後も有りて或
 法則いす一免く懐陸原をば東世りちるは牛とあるべしと
 いつ々に答く「平小有る合点ぢや招き候夕すぢみ一尾の巴
 静と伴歩一はりるこて兼名は後一舟一乗るなりぬはし一も去
 比尖を去せぬといふと歎きたりて此乃字評美の堂殿茶小ぢぢり

雲雀の妙唱するかり「笑えく洋くたる海よと喜まふ
 ぬほぬき繪やも及ぶぬ風系たり静村北齋中成叩い
 一勾何る屋一やと評ふ答て曰く古人も兼小達をも誦する
 と「一り初十かある交ゆくハ句按北登すは揚よ何るは
 今兼何才一系里とも高里と評す其の居性了「海ホ
 と兼小道成候るも人の推中もあありと評と感とては
 閑た里とつや喉争はと在まへ候りて通る「去年成候
 る時小尚川く風を慕ふ者多く後世連綿して流る
 一流成唱候と是すこ此老が性ちとすや

曲翠 附幻住老人

曲翠 賦と曲ハ江物撰の士く馬指堂と号に知れより意の
 小遊ぐを老手と稱せりる「念入てをりる譽む山茶を思ふ

夏はあつて居るる蟾蜍「言へる声は枯野の嵐より或年一丁
 深川菖菖居此終は付少く「菖菖小沼河らひ一沼やあれ後
 とは同執首我氏有日若君寵を以てより上中樂塵一して
 如らばるるも重里薄中多くと此が為る言わらば
 る什つ得く我家へすりー入息悲復我責く殺害一を文
 公去りく不旬殺してぐり風流此名を知るれども忠誠の志ハ隠
 れたり生事破流ハ和奇残能一且菖菖菖の名手有り破流ハ再
 照といふ如きを多く菖菖此名不附一も欠探名も懸てあり
 此は了生雅有る夏哉知く係釈様も此の如く名家と稱
 一川だー

惟純切

惟純切ハ流河此人素家實有なる一うども後志どか大嘗
 て燕門又遺遺一して惟純の粗若と唯依風雅意は人を風雅して
 畧に生涯破生菖菖不風雨残流ぐ性く此の吟あり
 「水多やむふ此岩く津ういつい一本ぞや若根若松風雪の
 ぞや一岩山のはあのをあく小妻う赤一時取けり走り
 晴ふりの途中産根をさるる件六に絶り残とく曰く吾
 子起す六十件六も水残流一産山此句を書置りて
 天狗集と名けりる其後の夏も里り母孫一受えたる句
 然と利との二の三つあり子梅菖松「梅の密河ういの意い
 あらみの手取遠慮世おりの屋一一年西玉り御の時菖
 鷹あつて小志る人あましく立あつるがえより狂僧此留ひ
 縁を流び肩残綴るる字物を字不撰りり其書の至意

忍く布一疋を女村よりよんでおゆら或旅したる
 城おし若物とて月継くぬへ残る債ふとんとしよよめ
 いそ紀継立きせぬ村登路起出り日が立席く云く移
 物若愚一屋衣り人されよと垢附くる古物を若う人
 又ずして去にりり又又又浪同往此所あ依能家よ宿る
 近頃妻を運くいとと度安の飾を収め小社河あそ衣
 小掛並りり下め路とく超く又子に宿借のは屋おけ衣
 此振袖とて月失りり押の彼城の盗へ依よ去とて立の
 若く主守く怪物村人若物とる小器此若く何れに
 らんと去り人此くく人宿屋里りるに果して重取も存
 るるの今路早り立出く依よ推し身小のく凌りり
 立席く男女此わらうちの覚ぬど是りてや何んと伊達
 振袖使人返りた望りりや又何まの玉りや存り母娘
 居此頃久く打ち籠りり何里り日を或人今宵谁家小
 いぢせせと人と初めける村お若を我目おく起目入
 契系給飯持で引直在申みか能借ちり結る成おり能
 せよとて何夏どやと答へりり殊よ人我も志まら日
 とハ此借れりりお依居り

勾空

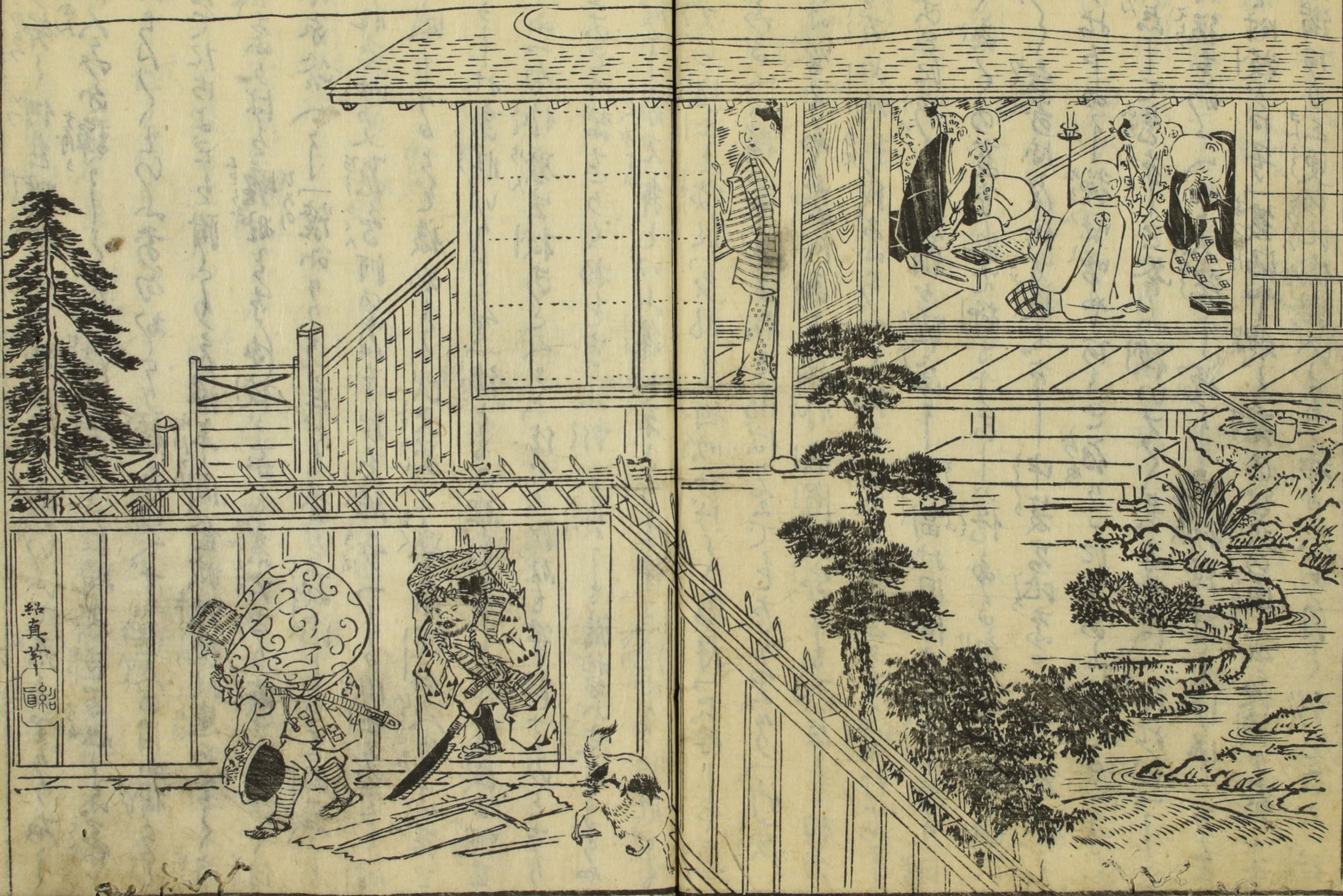
勾空を加別卯辰山了閑居り柳陰軒と号は常小雅波
 て意存成内とてふおりり沙羅も空深志を感ドていつ
 深く義仲奇少の世子此おりり兼好此画賛して秋の
 壺もちりりりり此残されぬ此ゆを徳物茶小再我捨
 此妄思を拂ふ捨く想法能とて月も持帰らきとつる人

五里秋氣零落北窓夜速多体たり初め新去出柳陰朝了後
 痛の名残休くいと賤くうらひ「愛る柳阿るドも我も陸を愛
 ちご涙ドてま出らる一年前が口号「履を履の横よちりんとり
 「折角己厭一ぐせよ月此雨又或時「梅が香や分入る里を牛此角
 さいつる名向も何里一

秋之材 附 李東

秋の坊も金塚小名言は風俗名隠士たり「凍つ紀を凍つきふぐら
 盤北風をどい「つる香深もあ里一或時妙子湖南の幻位唐一付
 ひ寄一小沙翁の「我高々故名小さ記を馳走うかこて一夜二夜の
 飯麻を伴はま一が村も道迷れ身ぢればとて堂々迅速のる
 いと懇一物澄一麓はで尺送り「屋がて此奴氣色色見えは襟
 此声と一夕の波流小立おまぬおに一飯ましく交遊の中も如枝

物才の逸士と称は「夕風一何吹りげく猶月「去厚一や暮
 残ある一ハ極意「来る秋之風ばり全でとちりうまろ「竹素
 洒小勢がや露附みそ出作去嵐此室も入屋一初免
 生友如柳新成奈らぐく酒を鬻く枝素より嗜むあり
 日おとにゆく「阮籍が壺空一「蒲匐此風俗を呈一たり日
 く夜くのまぢれた柳もすま一ハ倦ある氣色ぢればはけ
 後く云寄は度此才俊も有一申「復若比奈をうらぐ枝羽く
 そ出下め一「糗味嚼や何るそ存るに下めも酒はるすちん
 台島一て是方一と答ふ枝いそく是方くは一杯はむ一
 柳振をかく一へと大答一「強一酒極成伴一け極とちる
 其肘枝が口号「復酒や我と兼あび火の車或夜枝が家一
 能指何り三更の比偷見入り知り知る人あ月と形と告ぐ枝



紹真筆

打笑く何生珠掙ゆと出度一と戯いふて居ぬ里多りあり
 諸人みお静く一と生席を山照さし時又「甚る吐くふと葉が
 浦ちんくといふお句あうり枝を河へず「盗人の目お掛らる
 免でた由よこを附くりえ海平剛金城燈失れ患何をく
 念ふうばる腰紐とち海枝が家も累火きり友とち多く付
 東家答へく「煙ふりりはさども急を交遣一とて自若り
 されを世更飛る河の岩を記を能あつては風土赤里と時
 人感一くると後始とくび火炎く連る小後吾人先く東に
 むう一此案情いりてと一法ともお取と等もすみと成る烟
 申ゆ一何作廢生枝あくとく「法ともに取も等もすみとちり
 空よこの禁をりくおどち記形る愛も清静の忘けるそや
 此阿く家入舞といふ集お来りて中又「煙ふりりはれども
 櫻けりぬち支考「梅が香や海川一裏く煙入存牧童「字久
 ひはも笠をく笠れ小屋の屋板北枝又舊清お掛りく奇仙
 杖提の祝儀に系らす水鶏りお枝「曇りてすれど抑此急
 時後吾「板越る人の笠きて杖寄く支考暇或津の人は病床
 一在里日夜浦りりたる友を空とく枝をやみもたなく付ひ
 け起湯粥の世法やてもおたさるる鬼角する中疾篤くて
 治療術長とくを笑く文おゆりは割ぐ命終まると笑何を
 下く走王ゆ記寝室よのく生推杖叩き後吾く我を捨てと
 はりり生流る大流を注いぐりり掛てと妙極ち絶とる
 別く「遠く縁とるおちりて初め小磯中一舞も奇合く感
 たりとくやけを平生に交王思ひ厚くれくちりり

僧浪化

僧浪仕と東つ直一如大僧正の蓮枝山にて誠中并波瀾奇
 此位職あり一年慈養此推情をささぐふく武衣をそり
 落材舎ふて苦面して少才の石室波瀾此少才を其南
 砥波山集りもは志のなでとくそえぬ身を予と一こ思
 ぬる中我織すと記せり生一坐此夕成りめて必廟集と
 入るを鼻唇れ声や雄上川一平子の身みもちて時ぬり
 妻付や抱一掃ふ出のふ口え深十六年壯氣して夜に
 嗚呼をいふか

僧千那

伴少千那と江為堅固本福古の十二世一法名成成上人
 との嘗くも月くも蘭蓋切と号し生性軽悟敏達也一其
 此迦禁と稱さる所一連板のくとはるはや初接一楚れく此
 形や梅村一言灯籠をるハ物う記程う家常保八年了寂は七十
 有三歳あり

小川破笠

小川平助ハ江戸の人性多能して画と細工長せり能名宗
 字はトめ嘉言又従ひ後意門小遊ぶ業若う至一附の句に
 妻ふもと家人わりの小橋踏生身板傷うとく物接小味され亡
 命するもり教度或附本骨れ山中は休よひ入里高まつ記
 ちく行跡小倒甚体一衣履をか破果く既小を竹れ子笠
 如ぶ里身一と小堅一板或はとい食小を織たりれハ食
 形を方られぬ板山子うかと吟して名成破笠と改し里にあり
 空より江戸へ帰く晋子小妻富虚業集は食言の句何れく天和三年
 するはと年久一といふき後志家きりて津軽家へ出れ

食禄を以て延享四年八十餘歳にして死するなり

詰通

此通に何れ所の人あるはと我知るに若くは一に叔父の何れ
隠し人あり小孫より一我孫孫近に形跡の時道は傍らり
いひふ常風俗の流ぬ及ぶ幼少より好み一掃形をればとて
此奇我癖より出て着ぬ豈に去も穢くもはして「落」と名を
を給の傳くをばいひし中も茶花をあらはし一菊歌とて曰く我
まだ君家一侍人一時活の季吟の奇拙を呼ば我癖をた
後身より小令ハ徳階のみどう形小遊ぐ生涯は余みとに沙我
小後く萬さぐ一と沙才の構ふるをより海西の君をば何と
らまらる「山椒の幸く皮えぐはせよか」いぬくと人ふいられ
年此當妙え流形跡を湊せて出さく「固ふを何や海西

此秋北志一遠ふる何とく姑く沙才若中流より此
とも孫孫馬の流る又生花を洋ける世より孫孫竹林池
画がみづり出流所なり流るに或虫小義仲寺にて亡沙遊
俾の時世子大津の使者我流を生席を材ぐといひ又俾
舟は鬼妻回んく何とぬ那曲をせりと記さるハ大いなる
誤りより孫より孫の曲水く是す又虫小色
詰通より大坂小く置俗い多したるとの事生んはしと
年以より尺く来る夏ゆく今文藝く小是ら流と
此り徳園の書似を成すくいへ平生此人のては常
此人が流るる代方流し何の不審り有るや拙者
於く不画はるはどくは俗よ高望にて風軽の助け
方りいせんハむりぬ食よりハ務王可中の

二月十八日

お世線

曲水橋

捕風尼

伴賀列上踊り捕風尼といひるい小河風妻が女にて同爲
 夜回氏へ嫁するといふ交死して後難頼み一能落を以く宗
 子に意門北上子なりを秀流と名え一の名門やうこれて
 後りる椽ばいら生瀧忠句我撫く本禁集と名く世又形れ
 ず惜む屋一翁いまだ口小立く忠たうとま一時衣振忠
 世治ふと交らまうとらや後年深川の席人使して能落程
 といふ物を指りたり文彦はをたまき橋ふ己制せし物較あ
 して右の肩は一寸をうまみどりた振ふり東捕子不を生る事
 生風家あくと歎奈一

智月尼 附乙別

智月尼を江州大津郡志人乙別が母たり親ふとも風雅をバ
 夫坊んが意存紙沙と尺一年乙別が東行する我送るうて
 「わげとさ人尺ふゆく旅を不ニ北寄嵐茶を俾く」うき
 米去母一けり稿すぐぬ「まろく」手え屋す免を協一本を
 れで丁と命惜ちま橋意身北老衰をうとちく「我形も」わががかり
 小尺ゆる旅形くふ智月「海山の鳥海」ま川る雪吹くか「昼の
 昼する北東まは冬雪うか乙州晩年此尼沙ふむり川く紙
 筆裁備へ帝子の神り祀合せく我う形尺と威屋を物出を
 残しとくとまむ翁臨死方ぐらも六十小ちく祀尺小形尺
 まをまきいとい力ちくと戯れふぐら出て笑一とまふまを
 沙の死期ををらうとめ計を知れりや浪巻よりその愛

戎部東ア一も空年此子ふりー

經屋松風

經屋松風と江戸坊人との身きよ家一してすぶ家と一り一と
生涯いぢ身みの憂うれ何なん一兄あに仙風せんふうととも蕉せうのつ遊あそぶあそ歩あ
号あざなす「柳やなぎ打うち此こゝにに往むかふ一松まつ字なづ「らつらりらとと抜ぬ神かみのあ齒はやは秋あきの
風かぜ「あやあやあ日ひくくのこゝにに出で来き「あはあもも又また掃はらくく一あ同どう
りあ少すく海うみ深ふか川がははは房ふ戎じゆうむむすするる江えのの此こゝ有あ殊じゆう小こ力ちからをを足たせせり
とあなんなん一あ年ねん箱はこにに送おく別わか君きみ句く又また「あ何なにととあありり芝しば吹ふ風かぜもも氣きああまま
素す裳も水みづをを澤さわしてして秋あきあありりやや冬ふゆあありりやや作つく者ものもも去さるるはは只ただ
朽くりくのの深ふかききとといいくく王わう或ある出でるる少すく此こゝ後ご後ごのの人ひと支し考こうと
徳とく更さらせせ依よりり祀まつすすのの大おほなるなる妄まが誕たんありり牧まき童どうのの菓くわ門もん集しゆ
小こ松しょう風ふうよりより支し考こう人ひとのの文ぶん虫むし何なんりり空あか河がはははいいちちく

悪あくりりとと世よよりより居いるるはは一いくくははいいづづるるもも我われとと吟ぎん「あま
我われをを慰なぐさむむばばりりふふいいははるるははたたりりとと後ご々々とと一いちち年ねん此こゝ中ちゆうににと
進しん善ぜん北きた向むかいい清せいややゆゆくく有あるるははいいははるるははたたりりとと後ご々々とと一いちち年ねん此こゝ中ちゆうににと
「あ改かれれすす糸いとをを建た者もののの又またゆるゆる復かへのの中ちゆう
聖せい宗そう係けい十じゅう八はち年ねん八はち十じゅう條じょう茶ちや一いってて死しせせりり

野坡

高たか家け野の坡のをを越こええたた少すく妙めうのの人ひとははどどめめ江え戸どはは遊あそびあそびあそ後ご浪なみををにに位ゐ
すあ標めし本ほん社しゃとと号あざなはは蕉せうのの君きみ徒と不ふ附つけ合あのの作つく戎じゆう後ご々々とと一いちち年ねん此こゝ中ちゆうににと
然しかんんとと紹しやうのの係けい者ものちちりりとと不ふ可か解かい向むかああるる妙めうなるなる子こ經きやう經きやう
此こゝ出で生せい奴ぬ格かく子しりりああ長なが松しょうがが初はつのの名なでで来き海うみ原はらににあありり系けい「あははきき掃はら
除とりりててくく山やま茶ちや家け小こりり「あ江えのの極ごく高たかゆゆひひももやや神かみ去さるるはは
或ある夜よ盜たうそのの家やをを悪あく入いりり坡のをを登のぼりりてて云いくく我われ一いっ抱たうのの行ゆく

ふー唯系一竹こまゆー並りや、おはけはひけれ、紫打禁く
 んよりく、竟夜すんーと盗るふづれたる、彼世うち海つ
 松よすー、草席此名は、我、出れおとと踏出ー、我、席の極
 巨竅ー、櫻里先と何るを、足つ、幸何の、さる、やと、官、小坡
 糸く、此より、答ふ、左何、る、今、目、事の、存、極、色、句、作、ち、何、く
 和やと、披す、おり、ち、極、溜る、雀、交り、赤く、音、此、注と、盗、右、す
 感して、お、伊、知、けり、さ、人、と、成り、投、赤、る、る、此、の、如、く、一、書
 後、先、妙、の、聖、名、席、を、言、津、雄、小、極、一、句、ら、言、津、雄、の、存、と
 祢、せ、り、空、年、壽、我、を、る、に

誠智誠人

誠智誠人々尾陽、獲、珠、位、す、意、つ、の、老、才、を、り、一、尺、飯、目、は、あ、り、と
 い、屋、一、夕、に、み、一、棟、名、本、の、料、里、す、記、る、る、若、禁、く、か、一、茶、を、ら、る、
 抽、移、ら、る、と、牡丹、く、か、一、稗、の、種、れ、る、あ、り、たる、衆、色、く、あ、り、年
 江戸、ゆく、空、句、句、見、才、と、い、ふ、出、我、兼、一、て、誠、人、が、送、別
 れ、句、一、一、夜、と、記、の、公、屋、す、は、よ、終、世、粟、此、意、と、い、つ、る、に、一、夜、時
 は、風、と、種、ま、は、け、一、の、花、と、名、一、く、と、此、人、の、涙、中、と、夜、は、は、ら、る、
 沙、幕、も、色、を、軟、き、く、情、去、一、一、江、妙、の、修、拂、又、修、一、修、る、約
 何、り、一、小、何、一、の、誓、公、持、志、と、覚、一、り、一、や、若、紀、女、お、ご、お、入
 ち、一、り、も、有、一、我、存、を、法、終、里、何、ら、げ、る、る、我、憐、く、後、の、乃
 物、山、と、生、言、り、の、家、玉、の、何、と、多、久、味、皇、成、好、一、我、後、極、
 一、善、徳、一、思、ひ、切、る、時、猫、此、意、と、る、か、お、ち、ら、り、沙、と、此、樹、松、を、和
 よ、み、一、けん、後、の、櫻、集、は、此、句、我、は、如、入、何、り、一、と、と、色、と、君、子、の
 懐、む、而、お、れ、ご、又、玉、此、危、一、一、底、を、記、も、う、と、は、一、は、ま、を、此、
 瑞、鏡、叩、く、空、裡、を、知、り、も、お、と、色、を、此、人、の、風、流、を、る、は、一、や

病歿して後、若瀧の支考先妙の愛慕清純、皆れ傳ふごとく、毒言
を播く生、化松撰り、虫多くおして、古式を磨き、世人、我欺けり、
さて、古了、怒望、不猫、館との、い、虫を、着し、く、洋、り、生、能、を、弄
せり、實、我、后、に、涼、切、ある、清、潔、の、士、と、世、叟、の、り、ち、る、也、

涼翁

涼翁と、涼翁、山田、在、位、一、く、林、寮、あり、蕙、つ、小、松、ん、を、乙、由
と、名、我、等、く、良、堂、友、歟、何、る、ひ、の、神、風、録、と、号、す、一、楚、れ、も、神、氣
と、意、を、あ、り、今、昭、好、も、一、淋、げ、げ、く、呵、り、小、お、多、や、概、名、意、概、を
概、一、難、一、あ、り、概、何、り、後、一、概、あ、る、が、あ、り、此、句、老、成、為、徳
一、天、歩、れ、小、何、後、一、る、る、曇、く、小、一、身、の、上、我、只、去、存、水、り、り、ぬ、宿、翁
を、こ、く、世、空、り、邊、能、る、と、人、と、仮、神、一、一、學、履、を、能、く、お、て、後、ら、
後、人、を、一、く、存、ぬ、一、び、る、に、石、何、と、ら、ず、若、翁、と、を、和、の、名、よ、り、

直了、思、き、く、活、北、東、山、一、ゆ、紀、生、す、り、概、州、源、一、古、の、概、翁
一、く、又、り、り、く、と、終、小、長、壽、後、で、た、ご、り、概、一、こ、な、ま、堂、室、よ
堂、我、名、雅、人、と、稱、す、一、一、老、後、危、苦、小、た、お、ん、が、つ、人、松、上、
に、立、す、望、辞、き、我、乞、ふ、若、翁、眼、を、再、記、て、一、合、息、を、や、生、何、ら、
き、れ、子、親、と、云、つ、一、又、探、之、一、一、一、曉、の、生、を、保、存、一、や、と、再
捕、の、聲、喚、ゆ、乙、由、く、と、い、ふ、在、く、此、語、又、信、一、何、の、一、こ、か、ひ
や、何、ら、ん、生、境、此、松、字、と、言、語、疑、又、味、り、里、け、是、が、昔、水、争、我、説、
記、せ、る、時、後、き、小、息、を、終、ち、里、り、一、出、一、一、世、を、我、能、こ、一、一、
痛、症、を、患、く、死、せ、り、と、病、中、の、吟、一、今、後、で、八、人、が、居、む、と、
杉、の、ひ、一、小、我、身、好、く、人、小、か、く、の、社、合、と、生、儼、後、を、る、を、云、く、
以、て、一、強、又、備、一、

曾良

引良之信所後傳の聲なり一とせ東武又逆ぐ蕪つ又入里
 一時小名有り「はのくと鳥居むや密北妻」果多や脱離
 羽山一垣百尺のはあふちるあつて根荒ふふ水互及及と河急の
 市北は又按ずるに粟の細道より引良と後成居みく伊集國
 長崎といふ所小ゆり里阿れは先づいひて初と存く「ゆ紀」せ
 たふま休とも新若意又いそぐけりその怒み残るるら
 勝み雙友を危のあて雲又ほすふが如くは河阿急は河本の
 難情思ひ後成居一捨る流或之所人北越の山中又て内志
 桑小遠ひ引列れらるといふ大ある誤ちり若縁集し
 毎悔めての吟も「たがみ休て紅」は流汗拭と急答ふてと
 るは志の極まらば

系因字古

系因氏能名守古和別郡山北重居なり少小より縁情人
 起り「たふま休」東歌書古人扱はふに通るる或時人
 打家里梅の歌いごとて紐句せよと少材の云「妙子進
 中」一先うけの急の手扱や尚書梅を「先才廣」後して
 後變じそ蕪つ小入取貞享中少孫若勝小捨つる時その言
 に「流」あして一日松屋と三津北奇仙有り
 居持とあやうあるの池も先づるより後胤種屋の
 ぬり抄り集へるあはく去流ありまゝいり系は水は沙才の初と厚
 及成思小の志流ゆして之縁の比道は蕪つ離捨れあ尚と称
 ら流沙を及後すもそ追慕他小吳方り孫の笑後を初りて
 こそあきて「大系」小懸せは梅の急けり全流川へ居く「流」
 竹北財取や唐の流慕く清を「面」急るはひく梅は系采り流
 或の「鳴」千多れ死あはく懸るその超り「つむ」一殺く捨る

蓋面黒



豎一尺四分

粟穂及葉昔

三月月
銀泥

四寸

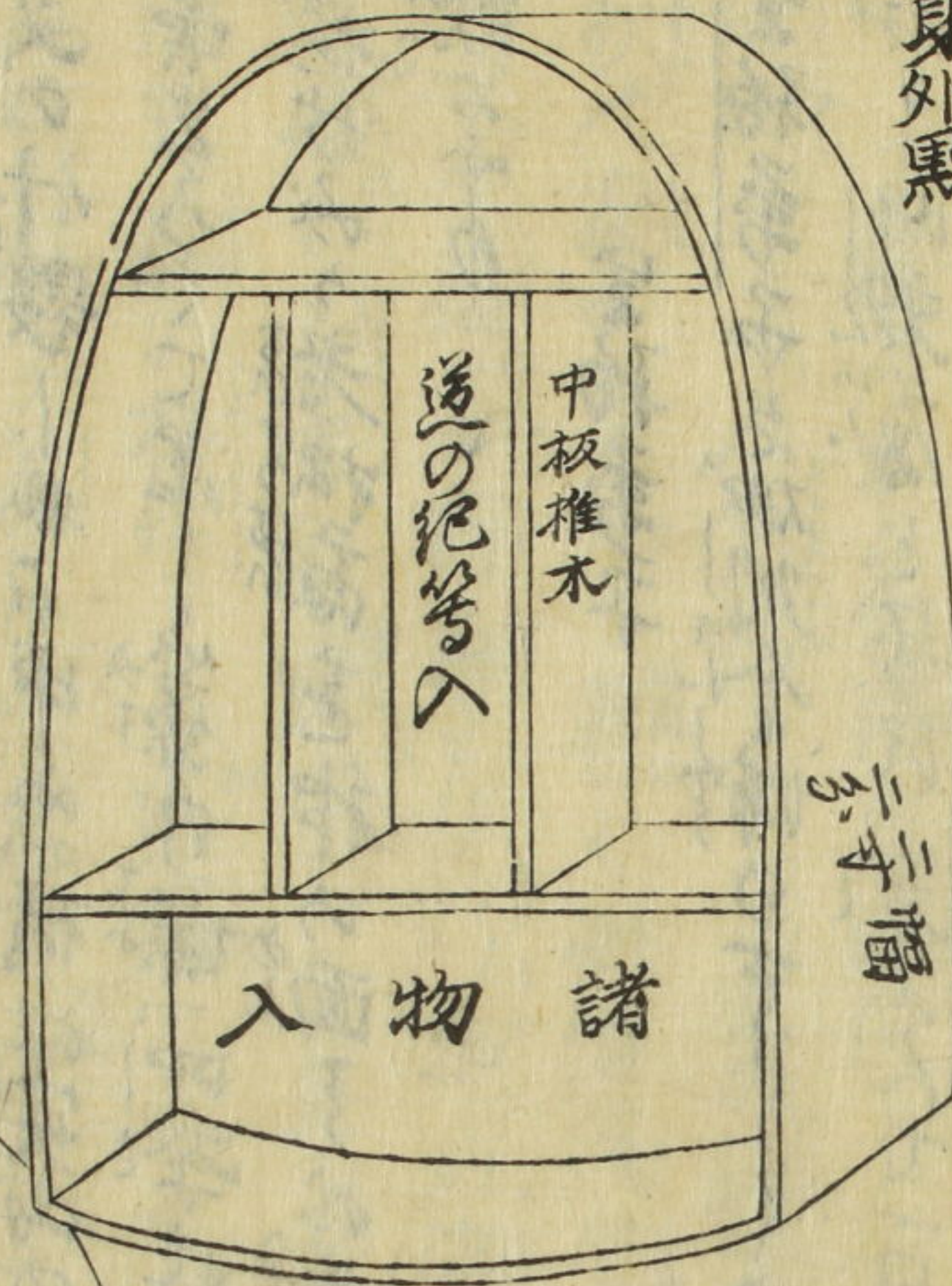
件日与弟子杜國有云

依之能清于時

翁駭別錄此一物既陀字

右深秘石室云

身外黒



二寸

入物諸

怪物若不同

焉今依其家他以識生

信来く正尔

儀伴采人



伊家書入談

卷之四

廿三

頭陀箱付

貞享年間意箱踏首

山之空道過

郡山而止於字古家十

蓋裏



袋綺水衣切

竹青

二寸

後有故逆為

正正處士有漢嘗行

而得摸之跡

火止く紅糸色為与附屬



朱青黄銀泥
雜色

軸葉花青

活禁りかき玉情おのひけりてー或年おとる「身ふりて梅
 け久日の名仏うまふ又或時清少納言といひ出せ居けまけん
 ちりりー死おととあ出て「虫干や梅北をく出母の年
 能のハ一句ー五花をくと金ほましく「急くの急れ花又ぬむ
 神儒仏の三教成と官れく「行北確又法の芽若く活井ー又回
 文の什懸ー替申お梅北実山の木おるや身名あは「雪の
 雲去ろくて思ー簾の障「四季北葉付おんく「葉つ沈れき
 「梅おみり考松蔭を神の面くお造作句中おるる「大際この
 類おみり

生駒翁子

生駒翁子と加別金持のまー家世く富り為翁と女ー
 若ー此若翁と号に「岩ふんで一日くの梅うか「春程よ三日思
 切る梅うか名珠の法はーめて翁お美面ーを回く沙
 法通ー「万人充滿ーく道の法互変足ぬ居ー我今あり才
 お此夜とちりて「普く能借成守獲す人ーと盟約せーと
 ちあり後年翁再びひ行跡の砌り金持一立寄れー此
 豊後く至里を達げると久屋美獨里得馬お策河とを
 経我慕い松任ーく追附ーりるの隣とてお衣おと月金三
 有口ーおすの解とを志名厚抄を感んせらは梅るに金泥
 法只我意の嬉方り二祥ー申され怒又此後秋と材が急
 廻を救い或と風涼れまとちあつく加陽ー「強人我遊ーむ
 有小蓬二切も此人家友とと怒あまし物子抱狂小を記せり
 世り「翁子我意つ十指おーく及を支持等と信り
 しばり「翁くそくするハ大いある僕里あり本邦又澄小翁の

友一子素崇何の記載あり

知足一家

知足之歩抄傳法上人慈翁と交り添一之居我叔照房
 恒藤亭と号す一志意く風流あり或る姓の二男三男とれ
 く小仕重なる後居小中若りる句「落葉河梁報くく」一在
 寂居ふ又「うら風や吹送吐く寂必一知足の子女此志
 徳く千を掛を著に「睡なく一夜く」夜若重一蝶羽「松
 根小多代茂河伝る時素く不知足母「里加よひういごうあや就
 厚隣母書「公素く一徳つこれ居素く蝶羽女素子

山口素崇

山口氏之に戸の人為小和漢比出を嗜く符文を吾に老母
 仕く至孝あり人何るひと事を送んる成すくむるを固辞
 して居みぬ是祝のふ小遠んる成忍れりなり等実の君子
 歎稱すく一弱冠あり季吟岩つ又燃く恒道比達者と居
 づる唐比名を今日といひ又来重こと素崇といふもその
 別号あり後又或主家成辞してあり深川の別荘に遊
 池成地里交友を集く晋比惠達を道社に擬せりあり恒
 あり「吾ら社中と稱するは是此等又依てな里句らそ社
 類すは句「池小精ふ一仮名く紀習ふ柳りな重作み素言志
 素種「年とちや一軍をりれつは後河「旨す紀ぬゆや月名
 十三夜「孫ま園こははと夜や鉦鼓疎人小捨灸せ
 同に「書禁山ほとくぎは初が川河豪快あり可見享保二
 年八月七十五歳一して歿せり或人慈翁は恒藤坊といひ
 んと号ふ唯死せりと答られ一と方りはまは翁と此變比

交際おれり多し古人の風阿里くいとあつりしに今時の
人招り断金成とあつて文小冠髻若く吳越を隣り
接成扱する者百と有し嘆息するに録あり

身は之を

思ふ事

秋の月

江州長谷村
長谷寺
天老

能家奇人談巻之申終

